

定年で振り出しに戻る



吉野勝美*

Come back to the origin after the retirement

1. はじめに

平成17年3月末をもって大阪大学を定年となり、フリーの身となったが、定年を迎えるに当たり色々な方から色々なことを云われた。

“残念ですね、勿体ないですね、まだまだ活躍していただけるのに”

“仕事人間の先生大丈夫ですか、仕事無くなったらアウトですね”

“先生だったらまだまだあちこちから引く手あまたでしょう”

“これで後は悠々自適ですね、好きなことが出来ますね”

“岸和田へ引っ込んでしまわれたらお会いすることもないし、淋しいですね”

“生活大丈夫ですか、年金が最近では随分少ないらしいでしょう”

“私も早く定年になりたいですね、どんどん定年の時の条件が悪くなるらしいですね”

“奥さん大変ですね、ずっと家にいたら奥さん困られるでしょう”

等々、まあ色々云われるものである。

最後の言葉には単純に対応することにしていた。

“毎朝、今まで通りに起きて、JR阪和線に乗って天王寺で環状線に乗り換えて、クルクル周り、昼頃になったら天満あたりで弁当を食べるか、食事して、コーヒー飲んで、午後もまた環状線をクルクル周って、夜になったら帰りますか”

それに対する答えも決まっている。

“それは良い考えですね”

ただし大笑いしながらである。

“何で早朝に出るんですか”

“早朝じゃないと電車混むじゃないですか、電車で座って仕事するつもりなんです”

そんなやりとりがあって定年を迎える直前、生産技術振興協会から、雑誌“生産と技術”の“夢はバラ色”なる欄に何かを書けと云う話しが舞い込んできた。定年を迎えると云うののである。

もともと何でも前向きに考えるたちなので、これまでもいつもバラ色でやってきたが、それをよくご承知の電気工学の杉野教授が、“恐らく今後も同じに決まっている、もっと大きく様変わりするかも知れない”と気軽に話しを廻してきた可能性が高い。

ところが面白いものである、と云うか有り難いものである。平成16年10月の末頃突然電話がかかってきた。電話の主は佐々木正博士。昼ご飯を梅田の阪急ホテルで一緒しようと云う誘いである。実は、元阪大産研の所長だった小泉光恵先生を始め何人かの、佐々木先生のお知り合いの方から、“佐々木先生が連絡を取りたいとおっしゃっている”、と云う連絡が入っていたが、小生が不在がちだったせいかもしれない、連絡が取れたのはやっとこの時、それも佐々木先生のほうから。

佐々木博士の経歴はよく知られているが驚くばかりである。

戦前からの仕事上での知り合い、友人が半導体と超伝導でノーベル物理学賞を二つも貰われたBardeen教授で、戦後すぐに調査、視察もあって渡米した時、Bardeenさんの自宅に呼ばれ話し込んで、“これからは半導体だ”と意気投合。その後日本で最初にいち早く神戸工業で半導体の開発に着手、人を求めて全国を廻ったが、電気工学の学生さんは全て売り切れ、東大の理学部の学生さんで残っていた



* Katsumi YOSHINO
昭和44年大阪大学大学院工学研究科修了
現在、大阪大学名誉教授、鳥根大学客員教授、鳥根県産業技術センター顧問、工学博士、電子工学

人に来て貰って研究をして貰ったその人が江崎玲於奈博士。そこで江崎博士はトンネル効果を発見しその後ノーベル賞を貰われたのはあまりにも有名な話し。その後シャープに移ってそこで半導体、半導体集積回路、IC、LSI事業、さらに液晶事業などを立ち上げ、副社長として牽引、定年とともに私財をなげうって自ら研究所、国際基盤技術研究所をスタートされるが、その間、米国NASAで宇宙事業に関与され、今も社長、会長、顧問などを多数兼務される御年89歳でまさに東奔西走で元気そのもの。この拙稿が掲載される時には90歳の筈。

“吉野先生も、昼食ビフテキでいいですね。私は後すぐに東京へ帰ってアメリカ人に会わないといけないので、ビールは今日は控えておきますが、吉野先生はいいでしょう”

それも凄く重い靴を持っておられる。

“重い靴を持つのは運動の代わりですよ。筋肉が落ちたらだめになりますから、体も気力もだめになりますから”

私も随分重い靴を持っているが、それと余り変わらないくらいである。

“吉野先生、定年ですね、来年。もうその後のこと決められていますか”

“いえ、話をしてくれる人はいますが、まだ決めていません”

“そうですか”

その後色々な話を1時間ほどして。

“それじゃ、今日はこれで”

と重い靴を持って、東京へ向かわれる。

この方こそ、夢はバラ色、一生バラ色のようである。その時のその他の話題。

“20年ごとに新しい転機で仕事変わってきたんですよ”

“これからはサプリメントが大事ですよ”

考え方が私とよく似ているとあらためて思った。もっとも行動力には大きな差があるが。

それから2ヶ月ほどたった夕刻大学に電話が入る。

“吉野先生、ごめんごめん、あれからアメリカへ行ってつい2、3日前に帰ってきたところです。

その足で島根県庁へ行って、机を一つ用意しておいてくれないかと頼んでおきましたから、そのうち電話があると思いますよ”

と云うことがあって、その後島根県庁から電話が

あり、仲田課長さんが直々に来られ、島根県にご協力することになった。

地方が大変、地方財政が大変、地方交付税など税制が変わるので産業の振興がないとじり貧になって大変なことになる。地方切り捨てと云われることのあるように、政府の方針もあって地方は大変なことになろうとしている。こんな中、島根の産業振興のために一肌脱いでくれ、と云うことである。

小生そんな力があるわけではない、経験不足である、と説明し辞退したが、結果的には佐々木先生のご指名でもあることもあって、受けることとなり、四月以降島根県と大阪の二足の草鞋である。

島根は島根大学客員教授と島根県産業技術センター顧問である。色々な人に話すと、“君の故郷だし凄く良いじゃない”と云ってくれるが、本人は責任重大、他府県なら兎も角、自分の故郷であれば極めて慎重にならざるを得ない。いつも次のことを云うと皆んなが大笑いしてくれる。

“佐々木先生、凄く先生で、これまで江崎先生を始め多くの人を引き出し、神戸工業、シャープ、ローム、韓国のサムソンなど多くの企業の発展に大貢献されたが、最後に人選ミスされたみたいですよ、私なんか無力の人間を指名されて”

もう一つというか、二つあって、平成13年から3年間科学技術振興事業団(現在は振興機構)の支援の元でプレベンチャー事業として“液晶による位置制御用精密測長器の開発の研究”を行ってきたが、その成果として会社を設立する義務があり、(株)大阪電子科学技術研究所、(株)大阪光科学技術研究所の二社を立ち上げた。これはメンバーに実務を任せ、会長という立場で大局的に見ていることになっている。

兎も角、こんなわけで定年とともに皆さんから云われたり、私が答えていたのよりも遙かに多忙な仕事を平行してやると云うことになってしまった。いずれも研究開発がらみで小生の好きな仕事に入るから、やっぱり、“夢はバラ色”であろう。もっとも、“夢はバラ色”，と云っても、もともと記憶力が悪く、夢はすぐに忘れるし、バラはきれいだなと見ているまにハラハラと散っていることが多いが、いつの間にかまた次の夢とバラを描いてしまう小生である。

何でも前向きに考えるたちと云うことは、何にでも興味を持ったたちであると云うことである。それが

産業技術センターに絡むことになったので、本来求められている領域を遙かに越えた色んな分野、内容に口を出して話しをしていると、やりたいことが次々と出てきてまさに“夢はバラ色”であるが、周りの人にとってはたまったものでは無かろう。

早朝から深夜まで働いて、暇が無くてこそ吉野君らしいと云われる始末で、仕事を辞めた時はおしまいの時だろうな、と云われることもある。これなど、佐々木博士の云われるように寿命限界まで生きて、生き生きと仕事して、パタッとこの世とおさらば、まさに理想に近いのかもしれない。“夢はバラ色”である。

定年とともに、はめられていた“たが”がはずれたようで、夢はどんどん広がり手に負えなくて爆発しそうである。

どうも、定年で振り出しに戻ったようである。気がついてみると、大学出たての頃のフレッシュな気持ちになっているような気がする。大学どころか、素直で、なんにでも関心を示し、なんにでも感動するもっと小さな子供の頃に返っているような気がする。定年はここで終わり、と云う出口であるのではなく、振り出しに戻ると云うことのようなのである。もう一度やりたいことをやるチャンスであるようである。もう一度改めて“バラ色の夢”を追いかけれると云うことである。

まず島根で与えられているミッションを果たすことは当然として、このミッションの他、と云うよりもこの中に持ち込んでやりたいと思っていることを少し話しておかないと、“バラ色の夢”の具体的中身を全く話さないことになりそうなので、少しだけ触れておこう。

本当にやりたいのは、自然に絡むこと、美しいこ

とであり、自然環境との絡みからもC, H, O, Nなどからなる有機物質に基盤を置くエレクトロニクス、オプトエレクトロニクスであり、生物、生命に学び自然と調和するもの、美しいものをやりたいと云うことである。これらはナノ構造、フォトニック結晶など様々な新しい概念に絡むものでもある。ところが、そのほか生物、生命そのものに絡むことにも興味が広がってしまっている。

ところで、こんな何んにでも興味を持って走り回っている小生は、家庭にとっては不在が当たり前の存在であって、大事な時に役にも立たず、あてにも出来ず、家族はたまったものではなかつたろう。定年後を期待していても、やっぱり、そのままでがっかりかも知れないが、いつも上、前を向いている性格はどうしても治らないようである。

もっとも、八卦見、占いの人によると、私と私の周りの人は一生お金に困らなくて、私は働いていないとだめ、と云うことらしい。私はしてみると、敷かれたレールの上をひたすら走ってきて、これからも走りつづけることになりそうである。

この拙稿はリスボンへの機中で書いているところであるが、実はこれを書きながら、頭の片隅では“あれをやったら面白い、あれでこんなことが可能となるかもしれない、この期待が大きいからこの人に話してみよう、日本に帰ったらすぐにあれをやろう、あれを云おう、あそこに云おう、あれしたら面白い、あれをやった人はいないに違いない”などと次々と色んなことが浮かんでくるので、早く日本に帰りたいと云うあせりにも似た気持ちが強くなってきて、“夢はバラ色”の原稿に集中できないが、頭の中はいつもやっぱり“夢はバラ色”であるようである。

